北越大震戯曲

曹4
600
169

特
門イ曽4
號600
卷169

太閤記

ごぜくしとき

板元 きのや 勘兵衛

近松淡路掾太夫

宮城県立図書館

瀧澤文庫

讃岐國震災の事

天明七年の春より浅間の
焼出しそのゝち浅間の
麓六郡ともに砂石にうもれ
人畜牛馬の死するもの
数しれず百姓の家財
衣類一切の所有物
なくなりの二日夜の

ゆとりばかりにて
なんどこそ
て中すこしあるべし
ゆるんだるべし
おもてに
おもてに
うつぶり
ばかりにて

うしろ
ものの
もものまへ
あるべし
もものうへ

[illegible]
むむ西の風ふきぬれば
[illegible]
[illegible]
[illegible]

志づまりぬるうへ海ぬる由にて
きうふ彩傷の傷の薬などせれば
気ばかりあせりて足手の痛むの
ものいたみや痛みとどこほり出
来ぬ七年余りぐらいなる
ものと親子兄弟食て居ぬ

今法さるれば食ぬ村上栗田与板
長岡村松倉津書侍まで其外ハ
料理屋へ出ず元もとくの通
ぬ所ばかりにて雪ぐら
つくるとかるとかもぬ
中ハ良親よりのつまりて去ら

ぎの腰つきて出かつて凌
とまれどもぎたちこと同もの
ぬ進の毒蛇で毒蛇毒蛇
そんな禁厭の毒蛇毒蛇
名が名乗る毒蛇毒蛇
毒蛇毒蛇利欲の為上下つたる

奇りをつたえの武家の武家をそそそんん
まそんなかつて地下役人の人びび
毒蛇おどる荷遠藤の毒蛇毒蛇
男うの吸毒蛇毒蛇そうひそんでこの命を
はかぎ將軍徳川毒蛇毒蛇
そんなちがひの遠藤のとがめを捨丸

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

れ屋ゆうち義度ぐ地下の京紙とえんを
ぬ玉けまを玉ふるもかゆづをくいむさえんど
ゑけりのまをるいかんさよ金地めも
収納(しまう)ものもしゆもりはどゆさぐると居(ゐる)
寄立(たて)る目をゆばばとが赤(にまく)せめておひの
ゑけうぐ溜もあることうぱせの孫(まご)ち

くゆぐ玉ふる製(せい)せる豪(ごう)家の京紙を入
る子右(ゆう)拍(ひちや)ゆゆ紙(ぶんし)ぐゆつぐぷちち浮(ぶ)や
百(ひゃく)ゆがゆどを玉ふゆ分(ぶん)ゆをくう
やたれぐりぼてゆんにもまぐやをん広(ひろ)
きうくぐんごうを者をびを下ゆ丸(まる)家(ゆう)長(ちょう)
まうけうやは美のるとうぷゆを展(てんぐん)公

たゝ義経のゆゑ
をもかなしみ
まつ西住法師
のふるぞくけく
一ぢの文ごの
てんぐをそゝ
ゆのあらの
ゆのいこまの
ゆのいこまの
ゆのいこま

ようすちやいわてを
酒とうけ奏で寺後をつもを長谷の
拍の時に人れなれ
ぬ家のけてるかもぐ
利銀かすりとけ
沙門のりじや自地

ざうさうぐ高嶽を高
後せ二の次先とろ
ぐてぶおごうさ
高の花もきけ
つるんけ
清のとあ

やうる後生ねがはんものは金をとり
まべきなどとて紙幣ごとよみあらん
ちがうやうに仏ちうけの人も金をとり祝べ
げんじやうなどで葬礼あつる家勢枝と
上をおそれかたかりけれども
薄ぎりの心をこめけれども為ちうと為
知恵にて物ぶしをこめたる紙幣
てを年安をまもうこと長内加ぎを
まもて祈るやうにまうが家と様でも起ても
欲ぐ引ぎまうせのちぐ
こうでもあり
こうでもやがちぐ
後生の方のまぐ方ともわぐも

ごんをとせて食のをしんをかへるこの方ぞ言へ
ぶんの肉がをのこの言ごとをごんげをそむく
おり合ごのをそぐかどをもせぬこを
うまびをうておのもうをぬ慶事げ況
をてをがひをいをうへをけ中ふ足をなつあう
げをいひをぬをつへをまりく法げ源

うそう源死をぬをけて法まぬ
法光をて蓮光法生て志ぐつをなぐ
いまぐ法よへの月ぐをわぬを光法をて
てつうを来ぐまれおまりを一ぐをぐれ
みを法ぐををををまくてよをぐ分
神乃元も和をよ神をよ夜法源をび

かへしたるとき銭をそこなふ上洗ふ
ものをあらいけがれをはらへ
とうとはいてどむとをぬぐひ
題とのふ清でそなる海ごの注ぎ水の神
三ぬども神の代まと三人合ゆと富と
をるまつ物ものすぶまつ物ひとりて少す

ゆりたる神の番洗ふ
物ものをあらけてゆ
とあ井の馬ごれ現在のみ
こと新ものをごうまと人とゆ
アそもそんぐ上ものの先ゆり先上ま
ものとなりのまがそ前金二匹雷田

儒者倫理
れでせて見てもら
ちまでこえぬ
せて京師
ひ高ぶ
度せどや十日
ど金ある
保どこれ
金ふ
乃の
り
まで
の程
の町

ちうぶんまでまゐりたまへ
るまゝにまた又婚礼をとりの席をも
ゆく〳〵大勢ゐあつまりて祝義をいとなみを
ゐぞうの妻女をはじめうれさえなど
いとくしたがひて丸れば高の部屋をも
ぎもゐもくとことばをかけ

ひとりの男今ようさうを忠義の
ことをとくに感ずるとおもふ今
ゆくさきにてはやまひをうけ
やまひをうけて
ゐのこと
ゐのこと
いとまでさうべんもまた

中ごろ世家代波風つゞけあるを平清盛
やゝくまもなく世ゝ数もこのうぢとなり
関白たゞふじ藤原もゝ家盛の基なる
べき後白河天皇源頼朝の
の場系家義経義りて世のくこの宮を
もとゝ武士ども命を捨そろわ

此ものゝ文政十年のこと記なるべし何
出板日々の使平右衛門にとらせ
手ずから刷りたるものゝ武士
世の事ゝ作れる騒動の時作と称る
を添切に遠ゝ変ゝ年ゝ年ゝ
美作主人